

35. サルの生息域コントロール試験

(1)忌避材炸裂装置による学習効果を利用した群の行動コントロール

村田仁・遠竹行俊¹⁾

〔目的〕

サルが頻繁に人里に下りてきて、人とサルとの間に大きな摩擦を生じている。その主な原因は1)山の環境の変化、2)山間部の過疎化と高齢化に伴うサルの追い払い圧力の低下と放置畑の増加が考えられている。

人手の追い払い圧力の代替として忌避材炸裂装置を使用し、効率的なサルの群の行動コントロールが可能か検証した。具体的には1)群の移動形態、畑等への進入形態、採餌の形態の特徴の調査、2)調査結果に基づく効果的な忌避材炸裂装置の配置方法の検討、3)その効果測定を行った。

〔方法〕

1. 群の概要：約60頭で、図-1のようにあきる野市西部約1,475haを行動範囲とし、久保河原、西戸倉、盆堀、荷田子地区等で被害を起こしている群である。
2. 群の行動探知：1999年6月に、群の亜成獣牝2頭と牝1頭を捕獲し、発信器を装着して放獣した。群の試験区への接近を受信機で探知した。
3. 試験区：久保河原、荷田子地区内の栗畑2カ所。
4. 試験期間：1999年7月20日から1999年10月9日まで。
5. 炸裂装置：無指向性炸裂装置（半径約2.5mにトウガラシ粉を飛散）とその改良型の指向性炸裂装置（一方向に約5mトウガラシ粉を飛散）を併用した。
6. 試験方法：サルが炸裂装置の有効被爆距離内に入ったことを目視で確認して被爆を繰り返した。

〔結果〕

群の栗畑への進入形態の特徴は、群が一斉に進入することではなく、5～10頭の一つの小グループがまず進入し採餌を始める、その間本体は、周辺の樹上で待機しており、少し間を置いて波状的に進入することであった。採餌の形態の特徴は、進入した小グループは樹上組と地上組に分かれ、採餌をすることであった。そこで、効率的にサルにトウガラシ粉を被爆させるために地上組を狙うこととし、図-2のように忌避材炸裂装置を地上約1.5mの所に設置した。

表-1に示したように、久保河原試験区においては、4回目までは被爆直後に再侵入され効果は見られなかったが、5回目の被爆以後、当日の再侵入は見られず、少しずつ被爆効果が見られた。さらに、6回目の被爆以降は、試験区内に数頭の出没はあっても採餌行動は見られず、群としての回避行動に近い効果があった。また、荷田子試験区においては、1回目の被爆で、久保河原試験区の5回目以降と同じ効果が見られた。現時点では、この効果の差についての原因は不明である。次年度には、新たに当群の個体を捕獲して発信器を装着し、被爆個体の行動を追跡することになっている。これにより、2試験区の効果の差を解明し、より効果的な群の行動コントロールの手法を開発していく予定である。

¹⁾ 西多摩経済事務所

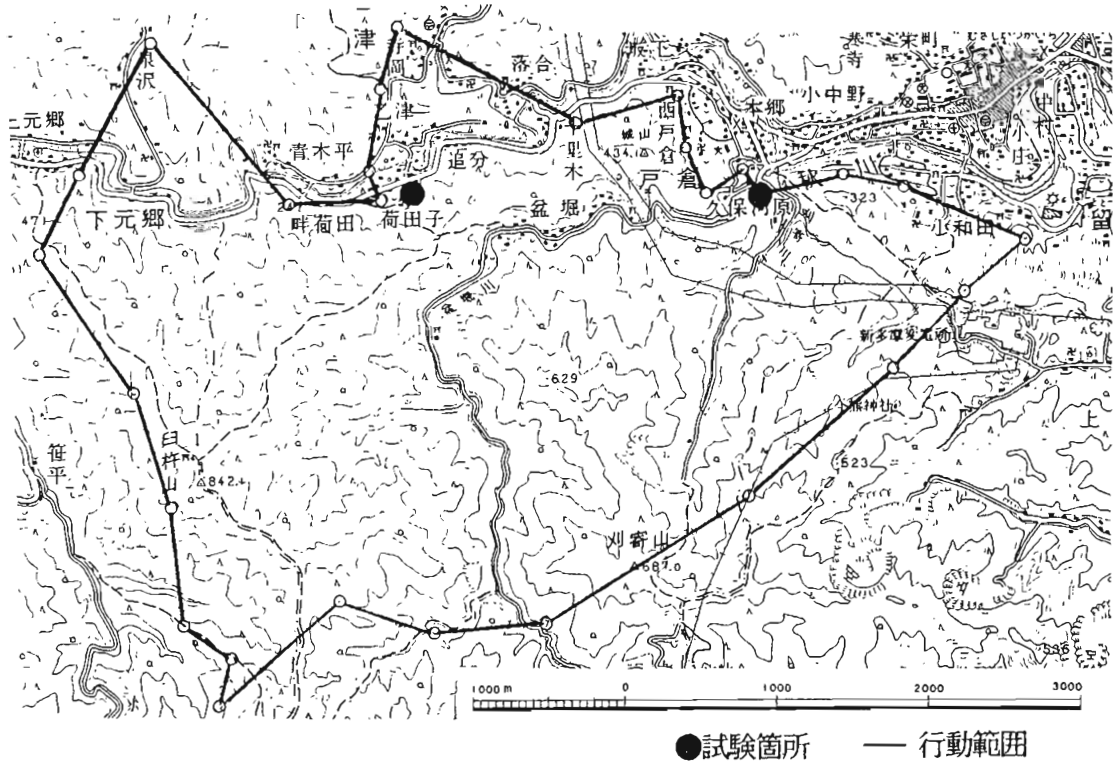


図-1 試験箇所及び群れの行動範囲

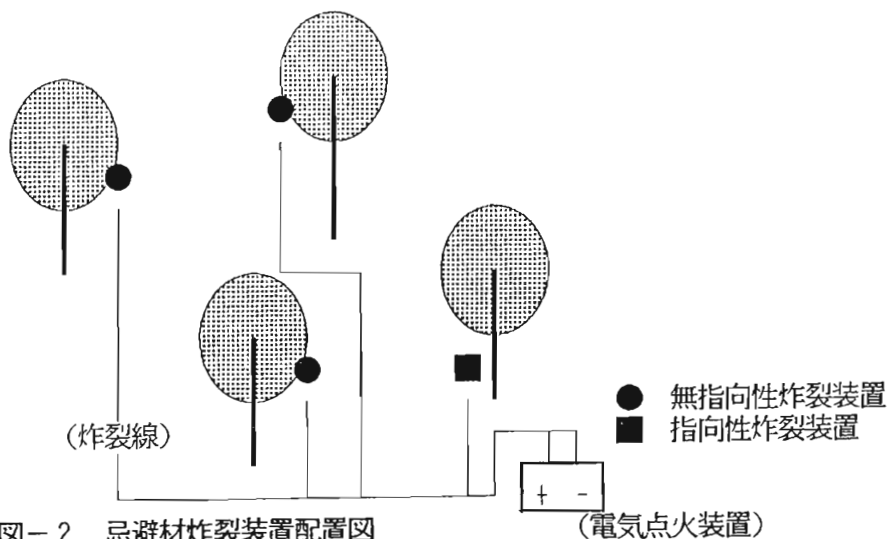


図-2 忌避材炸裂装置配置図

表-1 被爆前後の群れの行動

久保河原試験区				
日	午前	午後	備考	
8/25	—	…*…	被爆 3頭	
9/5	—	…*…	被爆 5頭	
9/6	—*…*	—	被爆 2頭	
9/8	—	…*…	被爆 5頭	
9/13	—	…*—	被爆 7頭	
9/24	—*…*	—	被爆 7頭	

荷田子試験区				
日	午前	午後	備考	
9/1	—*…*	—	被爆 7頭	
9/17	—	…*—		

… サルの進入, * 被爆